皇居外苑濠管理方針

平成 22 年 3 月

目 次

	ページ
1 本方針の位置づけ.....	1
2 皇居外苑の位置づけ.....	1
(1) 皇居外苑の設置に係る位置づけ.....	1
(2) 皇居外苑の持つ諸側面からの位置づけ.....	1
3 皇居外苑濠の現状と課題.....	1
(1) 全体的な事項.....	1
(2) 要素毎の事項.....	2
4 基本的な目標と取組.....	7
(1) 基本的目標.....	7
(2) 取組の方向.....	8
5 要素毎の目標と取組の方向.....	8
(1) 景観.....	8
(2) 水質.....	9
(3) 生物の生息・生息の場.....	10
(4) その他.....	11

別添1 濠別管理方針

別添2 皇居外苑濠水質改善計画

参考資料 皇居外苑の位置づけについて

皇居外苑濠管理方針（案）

1 本方針の位置づけ

本方針は、皇居外苑の特質を踏まえ、濠管理の基本的な方向と基本的な目標を示した上で、景観、水質等の個別要素についての目標と取組を記述したものである。

ここで扱う濠は、皇居外苑で管轄する 12 の濠とし、水面の他、濠として一体となった堤塘（ていとう）、石垣、景観的に一体となった石垣上の樹林も含むものとする。

2 皇居外苑の位置づけ

皇居外苑濠の管理方針を示すことに先立ち、皇居外苑の位置づけを確認する。

（1）皇居外苑の設置に係る位置づけ

皇居外苑は、昭和 24 年に旧皇室苑地の一部を一般に開放したもので、平和的文化的国家を象徴する場として設置され、皇居の前庭としての特殊な性格を持った国民公園である。また、新年の一般参賀、御即位二十年慶祝行事などの国家的な行事の場となっている。なお、本指針では、このような皇居外苑の設置に係る性格を「象徴性」として扱うものとする。

（2）皇居外苑の持つ諸側面からの位置づけ

皇居外苑は、我が国随一の規模を有する江戸城の城郭の一部をなし、濠、城門、石垣などの歴史的遺構を残すことから「特別史跡江戸城跡」に指定されており、江戸城の歴史を継承する空間となっている。

また、皇居と一体となった樹林や濠の水面は、都心にあって貴重な水と緑の空間であるとともに、様々な生物の生息・生育の場ともなっており、地域における生態系ネットワークの拠点としての観点からも重要な存在とみなされている。

さらに、内外から多くの人を訪れる場であり、都心部の居住者、就労者にとっての身近な憩いの場ともなっており、また、ヒートアイランドの緩和などの観点からも重要性が指摘されている。

3 皇居外苑濠の現状と課題

皇居外苑濠は、皇居外苑の重要な構成要素として、上記の皇居外苑の位置づけを支える役割を担っている。これを踏まえ、外苑濠の現状と果たしている役割、課題等を以下に示す。なお、各要素は個々に独立したものではなく、相互に関連するものである。

（1）全体的な事項

①経緯、諸元等

皇居の濠のうち 12 の濠（桜田濠、蛤濠、桔梗濠、凱旋濠、半蔵濠、千鳥ヶ淵、牛ヶ淵、清水濠、大手濠、和田倉濠、馬場先濠、日比谷濠）は環境省において管理している。濠全体の水面積は約 37ha であり、外苑全体の面積 115ha に対して約 30% を占めている。

かつては、千鳥ヶ淵と半蔵濠が一つの濠であり、凱旋濠～日比谷濠～清水濠も橋は架けられていたが水面はつながっていた。その後、道路建設等による分断があり、

現在のような形となった。また、かつては蛤濠も、現東御苑内の濠とつながっていた。皇居外苑濠の水系の分水嶺は半蔵門付近にあり、半蔵濠から大手濠に至る時計回りの流れ、桜田濠から蛤濠等に至る反時計回りの流れの2つが合流した桔梗濠から日比谷濠に至る流れが存在する。濠水は、水系の末端部の日比谷濠から下水道に放流されているが、一部は清水濠から日本橋川に放流されている。なお、皇居外苑の濠は、公共用水域とみなされているが、利水等はされていない。

②象徴性の維持に関連する事項の状況

皇居外苑の濠のうち、桜田濠、蛤濠、桔梗濠、半蔵濠は、御所や宮殿など、皇居の中心部を取り囲み、周辺との境界をなしている。これらの濠は、皇居の前景となっており、皇居の奥深さ、神秘性を表しているが、堤塘の草地、水面、樹林によって構成されているため、穏やかで、親しみのある印象となっている。

また、桜田濠の下流側、二重橋濠(宮内庁所管)、蛤濠は、皇居前の砂利広場や松の植栽、芝生広場、正門、二重橋、坂下門などと一体となって皇居前広場を構成し、皇居の前庭、国家的行事の場の一部となっている。

このように、皇居外苑濠は、我が国の象徴としての皇居や皇居外苑の印象の一部となっており、この維持のためには、水質の保全を始め、景観上の支障が生じる構造物などを設置しないなど、さまざまな面で管理上、重視されてきたと考えられる。このようなこともあり、上記の濠については、現時点で象徴性の維持にあたっての大きな問題は生じていない。しかし一方で、千鳥ヶ淵、清水濠などは、皇居中心部と直接接するものではないが、水質の悪化に伴うアオコの大量発生により、皇居外苑全体の象徴性を損ねかねない状況となっている。

③歴史性の継承に関連する事項の状況

皇居外苑の濠は、江戸城築城と同時期に、自然の地形を生かして造成されたものと考えられており、濠は、堤塘、石垣、門などととも往時の風情を残していると考えられ、濠自体が江戸城の遺構となっており、「特別史跡江戸城」に指定されている。

歴史性の継承については、濠が重要史跡に指定されていることもあり、これまでも管理上、現状の維持が重視されてきたことから、基本的には維持されていると考えられる。

しかし、濠、石垣等の遺構は、経年とともに補修が必要となる箇所があり、また、比較的新しい時代に従前とは異なる形状で補修した箇所もあり、このような箇所について、景観や文化財上の価値を踏まえて、必要な補修や修復を行っていくことが重要である。

また、堤塘の草地や石垣上の樹木も、放置すると根の成長等により遺構を破損したり、歴史的景観を損ねるおそれがあるため、適切な管理が必要である。特に、日比谷濠、馬場先濠などの石垣上の樹林は、石垣上の連続した樹冠ラインが緑の景観として評価されているが、石垣に近い場所に植栽されているため、このまま放置すれば根の成長等により石垣を破損するおそれがある。

(2) 要素毎の事項

①景観

景観は、環境の諸要素が集まって形成される総合的な事象である。このことか

ら、上記の皇居外苑全体の特質を示す事項である象徴性や歴史性は、景観と密接な関係にあり、皇居外苑として重要な景観は、象徴性、歴史と関わりの深い景観と言える。この景観の現状は、前項の記述に重なるため省略する。

一方、皇居外苑濠は、堤塘の草地、周辺の樹林と一体となって都心では貴重な自然の景観を形成している。この景観は、都市の中では貴重な水面や広い草地の景観であり、また、皇居の森の前景でもある。冬期には、水鳥が飛来し、都心において貴重な自然景観となっている。

この水と緑の景観は、都市の中の景観という面でも、都心部の重要な構成要素となっており、例えば、半蔵門付近から霞ヶ関方面への景観は、皇居を含む都心部を眺望する雄大な景観であり、この地域の象徴的な景観と言える。さらに、日比谷濠、和田倉濠など市街地に隣接した濠は、夜景などで都市的景観の構成要素となっている。

皇居外苑の景観は、東京都や千代田区の景観行政において重要な位置づけがなされている。

景観は、各要素の総合という面が大きいと、その改善に係る課題についても各要素において対応すべきものが多いが、中には景観改善と直接的に関連する課題もあり、それを以下に示す。

- 水面に繁茂する水生植物は、現在、牛ヶ淵のみで見られるが、これは、昭和30年代以降に、景観上、水面への植物の繁茂を抑制すべきとの方針からソウギョ等の放流を牛ヶ淵を除き行ったためである。この方針は、水質、生物の生息・生育環境の改善等との関係で今後再整理する必要があるが、それに先立ち、濠の景観としての水生植物との関係を整理する必要がある。
- 濠の周辺にある樹木の成長、樹形の変化は、濠の景観に影響を与えている。特に、園路や園地から濠を眺望する場所の付近の植栽は、成長に伴いその眺望を阻害している場所もある。また、逆に目隠しを目的とした植栽が、下枝の枯れ上がりなどに伴い、目隠しの効果が低くなっている場所もある。
- 千鳥ヶ淵沿いのサクラは、千鳥ヶ淵緑道（千代田区）などの植栽と合わせてサクラの名所となっている。しかし、既に植栽以来相当な年数が経過しており、近い将来、後継樹について検討する必要があると考える。

②水質

ア. 経緯

皇居外苑の濠の水は、かつては玉川上水から導水されており、昭和40年までは、新宿の淀橋浄水場から、玉川上水管路を通じて余剰水が導水されていた。しかし、同浄水場の廃止に伴い、それ以降、一時的に東京地下駅工事に伴う湧水の導入を行ったことを除き、濠への水の供給は、そのほとんどを雨水に頼らざるを得なくなった。

また、降雨時における合流式下水道からの越流水や流域からの落葉、ごみ等が濠に流入し、それによる負荷の蓄積の影響を受けている。このように、水供給の不足による濠水の滞留や流域内外からの汚濁負荷により、水質が悪化しており、夏から秋にかけてアオコが大量発生し、悪臭や景観上の支障が生じている。

環境省では、「皇居濠水質浄化対策検討会」（昭和50年）における検討において、アオコの大量発生による支障の防止を図るために、濠水改善目標を設定している。

イ. 水質の現状

皇居外苑の現況の水質（平成 16～20 年度の平均値）と濠水の改善目標値を以下に示す。

指 標	現況の水質	濠水の改善目標値
透明度	1.2～0.3 m	[1～2 m]
COD	5.2～ 16.4 mg/L	[2～5 mg/L]
クロロフィル	14.8～108.9 μ g/L	[8～30 μ g/L]
T-N	0.8～2.8 mg/L	[0.33～0.6 mg/L]
T-P	0.03～0.26 mg/L	[0.02～0.05 mg/L]

T-N を除くと、改善目標値を達成している濠もあるが、全体としては目標を達成していない状況にある。

最も水質が悪い濠は、千鳥ヶ淵であり、次いで、牛ヶ淵、清水濠、大手濠の水質が悪い。これには、上流にある千鳥ヶ淵からの濠水の流入が影響していると考えられる。これらの濠を中心に、夏から秋にかけてアオコが発生している。

一方、桜田濠、蛤濠、桔梗濠、半蔵濠などは、比較的水質が良好であり、アオコの大量発生による問題は生じていない。

ウ. これまでの対策と課題

【濠水浄化施設の建設・運用】

SS（懸濁態浮遊物質）の削減による透明度の回復を目的に、循環濾過処理方式による濠水浄化施設を整備し、平成 7 年から運用を行っている。施設では日比谷濠から濠水を取水して浄化し、半蔵濠、桜田濠に放流している。処理能力は、一日最大 20,000m³とされている。

浄化施設の運用後、水質は一定の改善が見られたが、近年は経年による処理能力の低下、渇水時の日比谷濠の水位低下による取水停止、運転に伴う電力・下水道使用料等の削減等から施設本来の能力が十分に発揮されない状況にある。

【アオコの発生状況の監視と除去事業の実施】

アオコの発生状況を監視するため、夏期を中心に各濠を巡回し、大量発生が見られたときには、ポンプやバキュームによる回収を行っている。これらは、一時的なアオコ除去に効果を発揮するが、対症療法的な対策にとどまり、抜本的な水質の改善は期待できず、原因療法的な対策が必要である。

【濠の干しあげ（水抜き）等】

濠の干しあげ（水抜き）は、濠の底を空気に晒すことによる濠底堆積物の酸欠状態の改善、枯死した水生植物、ゴミ等の除去を目的に、牛ヶ淵で実施している（H15、H20）。

この方法は、比較的低コストでの実施が可能であるが、自然排水による実施が可能

な濠が牛ヶ淵のみであり、一つの濠だけでの実施では、上流の濠からの流入により効果が薄められてしまうこと、生物への影響に不明な点があること等から、現在の方法を単純に継続することには問題がある。また、濠の水生植物は、除草を目的に放流したソウギョ等のため牛ヶ淵を除き、繁茂は見られないが、水生植物の生育と水質に関する近年の知見の集積を踏まえ、水質管理の観点からの水草管理について改めて検討する必要がある。

【下水道越流水の流入防止】

現在、千鳥ヶ淵などでは、雨天時に合流式下水道からの越流が見られる。この流入は、東京都により、平成 25～27 年度までに降雨時における合流式下水道からの越流水の流入がなくなる予定であり(1 時間雨量 50mm 以上の豪雨時を除く)、環境省もこれと連携して、北の丸地区において下水道の雨水・汚水の分流化を進めているところである。

また、下水越流水の流入がなくなることにより、濠内への流入負荷量の削減が見込まれるが、これだけでは、水質の大きな改善は困難と予想されており、今後も引き続きあらゆる浄化対策を実施する必要がある。

また、現在の下水越流水は、水質悪化の一因ではあるものの、一方で水量の確保に寄与している側面があり、特に渇水期においては、一時的に日比谷濠の水位低下が懸念されるため、水門の操作、補給水の確保などの対応も重要と考えられる。

③ 生物の生息・生育環境

ア. 全体的事項

皇居外苑濠は、人工的に築造されたものであるが、自然の地形を生かしたものであること、築後 400 年が経過していることから、周囲からさまざまな在来の生物が入り込んでいたと考えられる。また、固有生態系を維持しているといわれる皇居と一体となった空間であり、外部環境との緩衝帯としての機能を有していると考えられる。

皇居外苑濠の現在の生物の状況を見ると、ツツイトモ、ベニイトンボなど絶滅のおそれのある生物をはじめ、ウキゴリなどの在来種、多くのトンボ類、ホタルなどの昆虫類、エビモなどの水生植物、カモ類などの鳥類等が生息・生育している。また水域以外においても、石垣でのヒカリゴケの生息や堤塘部の草地など大都市内において貴重な生物の生息・生育空間となっている。

このように、皇居外苑濠は現在においても、都心部にあって貴重な生物の生息・生育場であり、今後の対策によっては、従来から外苑濠の有していた生息・生育環境としての潜在能力を復元させることができる。そのことによって、皇居とともに、周辺地域を含めた生態系ネットワークの構築に寄与することも期待できると考える。

このためには、現在、水質の悪化や外来魚の侵入などによる生物への影響を改善することや、象徴性、歴史性を維持、継承しながら、皇居外苑の有する生物の生息・生育環境としての潜在能力を高めていく管理手法について検討していくことが重要であると考えられる。

イ. 魚類

外苑濠には、ギンブナ、ヨシノボリ、ウキゴリなど、周辺地域で見られる魚類が生息し、都心部において貴重な在来淡水魚の生息場所となっている。

また、水生植物の抑制を目的に放流されたソウギョ、カムルチーやコイなども生息しており、濠の生物相に大きな影響を与えている。

さらに、近年、一部の濠を除きオオクチバス、ブルーギルなどの外来魚が侵入し、生息環境を攪乱している。これに対しては、近年、電気ショック一船による駆除を実施しており、外来種の生息密度の低減に一定の効果を挙げている。

今後は、在来種を保護しつつ、ソウギョなどの水草管理として導入された種の管理、オオクチバス等の外来種の抑制を各濠でどのように行っていくのかを具体的に検討することが重要である。

ウ. 鳥類

外苑濠には、都心部の貴重な水辺として、四季を問わず様々な鳥類が見られる。通年では、ユリカモメ、カルガモ、サギ類、カワセミなどが見られ、冬期には、多数のカモ類が飛来するなど、都心部としては貴重な鳥類の生息場所となっている。なお、飼鳥としてコブハクチョウを飼育している。

さらに馬場先濠、日比谷濠などでは、バードウォッチングも盛んに行われており、地域において貴重な自然観察の場となっている。

エ. その他の水生動物

は虫類・両生類については アズマヒキガエル、クサガメなどの在来種が生息している一方で、ウシガエル、ミシシッピーアカミミガメといった外来種が確認されている。ウシガエルについては、牛ヶ淵において駆除を実施している。

昆虫類について、トンボでは、イトトンボ類を含め 20 種以上が確認されており、牛ヶ淵、桔梗濠ではヘイケボタルも確認されている。ヘイケボタルの生息数は、年によってはほとんど見られないこともあるなど不安定であり、現在の環境が必ずしも良好であるとは言えないが、トンボやホタルなどが生息できる環境が残っていることは事実である。このような種が安定的に生息できるように環境を維持、管理していくことは重要と考える。

オ. 水生植物

外苑濠には、牛ヶ淵を中心に水生植物が生育しており、ツツイトモ、エビモなどの沈水植物や、ウキクサ、ハス、ヒシ、ヨシ類、ガマ類などが見られる。

水生植物は、桜田濠などにも見られるが、特に牛ヶ淵で多く見られ、夏期にはハス、ヒシ、ウキクサによって水面が覆われることもしばしばである。

浮葉植物等の繁茂は、景観管理や水質の上で支障となるため、昭和 30 年代以降、ソウギョ、カムルチーが放流されている。また、かつてはコイも放流され、これらの種が水生植物を捕食した結果、ヒシ、ハス、ウキクサ等の繁茂する濠は、ソウギョ等の放流のなかった牛ヶ淵のみとなっている。

水生植物は、景観や水質管理の面で支障となる種があるものの、一方で、保全すべき在来種も含まれ、他の水生生物の生息・生育環境ともなっている。

今後、外苑濠の生物にとっての環境の質を上げていくためには、景観、水質管理と調整を図りながら、適切な管理方法を検討していく必要がある。

カ. 石垣や堤塘部の生物

【千鳥ヶ淵周辺のヒカリゴケ】

濠に付帯する石垣や堤塘にも様々な生物が生息・生育しており、中には、この場所に独特の種もある。

千鳥ヶ淵の石垣には、コケ類の一種であるヒカリゴケが生育しており、その生育地として天然記念物に指定されている。ヒカリゴケは生育環境の変化に敏感であり、管理上、慎重を期する必要がある。

【堤塘の草地】

また、堤塘の草地は、定期的な草刈りで維持されてきたが、このことにより、在来種の草本が比較的多く生育しているとの指摘もある。ただし現在、草地性昆虫の生息等への配慮は特に行っておらず、今後、草地管理の中で、昆虫類への配慮について、検討する余地があると考えられる。

④その他

ア. 公園利用の場

外苑濠は、国民公園皇居外苑の一部として、内外の来訪者を迎える場であり、桜田濠下流部、桔梗濠、大手濠などは、二重橋、櫓、門などの背景や前景として来訪者の多い場所である。

また、濠沿いの歩道や苑路、広場は、散策やジョギングなどの場としても利用される他、千鳥ヶ淵や半蔵濠沿いは、サクラの花見の時期には、多くの来訪者を受け入れている。

外苑濠の利用は、風景としての間接的な利用が主体であるが、千鳥ヶ淵では、ボート場としての利用が行われている。また、馬場先濠、日比谷濠などを中心にバードウォッチングの場ともなっている。

なお、千鳥ヶ淵では従来より、地域の行事として、夏に灯籠流しが実施されている。また、和田倉濠などは、近年、ライトアップイベントの開催場所として利用されている。このような行事は、地域との連携として意義があるものの、一方で、一時的なものであっても象徴性、歴史性の維持、景観の保全、生物への影響について慎重に判断した上で実施する必要がある。

イ. 都市環境の緩和

外苑濠は、都心部最大の止水域であり、皇居とその周辺の樹林と一体となった水と緑の環境として、周辺に比べ夏期に高温になりにくい「クールアイランド」を形成しており、都心部のヒートアイランド現象を緩和する機能を有している。

4 基本的な目標と取組

皇居外苑の位置づけ、濠の現状等を踏まえ、濠管理の目標と取組の基本方針を示す。

(1) 基本的目標

○我が国にとってかけがえのない、平和的文化的国家の象徴として、皇居の前庭という特別な性格を有する国民公園の重要な構成要素として、厳かさ、穏やかさ、

静けさを併せ持った品格を維持する。

- 江戸城址の遺構の保存とともに、江戸城を中心とした近世から現代までの歴史と文化の積み重ねを伝える景観を保全、継承する。
- 都心部にあって貴重な水と緑の環境を維持し、皇居外苑濠が生物の生息・生育の場や地域環境に対して、本来有している能力を修復する。
- 皇居外苑の特性が損なわれないよう配慮しつつ、内外からの来苑者を迎え、皇居外苑濠の魅力を適切に伝える。

(2) 取組の方向

- 象徴性の確保については、基本的にこれまで継承してきたものの維持に努める。また、水質の悪化によるアオコの大量発生は、象徴性を損ねるおそれがあり、水質の改善を図る。
- 歴史の継承についても、基本的に現状の保護に努めるが、全てを現状で固定するものではなく、継承すべき事柄の現状把握につとめ、経年劣化や過去の不十分な対応に対して必要な補修、修復を行うとともに、樹木の成長等に応じて、必要な植生管理を行う。
※日比谷濠などの石垣の保全のため、将来的に石垣上の樹林は、伐採、移植、剪定などにより段階的にセットバックさせるなどの措置を進める。実施工法については、今後、検討を行う。
- 生物の生息・生育環境の確保、憩いの場としての利用、都市環境の緩和などについては、象徴性、歴史性を損ねない範囲で行う。
- 取組に当たっては、濠に関する情報提供に努め、国民、関係者の共通認識をつくることに努めるとともに、国の他の機関、地方公共団体、民間、学識者などとの連携に努めるものとする。
- 濠毎に管理方針を作成し、具体的な管理に活用する(濠別管理方針：別添1)。
- 本管理方針は中長期的な視点での方針を定めるものであり、方針の見直しは特に必要がある場合に行うこととする。なお、見直しの必要性について判断するため、定期的に方針の点検や関連データの更新を行うこととする。

5 要素毎の目標と取組の方向

(1) 景観

①目標

- 象徴性の確保、歴史の継承に係る景観について、現在の景観の保全を基本としつつ、適切な植生管理、眺望の確保、遺構の補修、修復を行うことで、より良好な景観の形成を目指す。
- アオコによる景観上の支障(臭気を含む)が生じないように水質管理を行う。
- 自然の景観については、象徴性、歴史性との調和を図りつつ、単に外観だけの自然らしさではなく、生物の豊かさも反映させた景観を目指す。
- 都市の中の水と緑の景観として、皇居外苑の特性を損ない範囲で、憩い、安らぎの場としての景観づくりにも配慮する。
- 光環境、音環境についても、皇居の特性に調和した静謐さ、品格のある環境を目指す。

②取組の方向

【眺望の確保】

歩道や園地から濠への眺望を確保することが望ましい場合、警備面、安全面等の観点で関係機関との調整を図った上で、可能な限り濠側の眺望を確保する。この場合、植え込みや侵入防止柵等による安全の確保、視点の確保のための植栽の管理などについて留意する。半蔵門から警視庁前にかけての桜田濠の景観については、この観点からの管理が必要である。

【景観としての水生植物管理】

濠の水生植物は、水面全体に繁茂すると景観や水質管理上の支障があるため、ソウギョ等の放流などによりこれを抑制してきた。しかし、水生植物は自然景観の構成要素であり、生物の生息環境にもなっている。これを踏まえ、今後、象徴性、歴史性と調和した適切な水生植物の管理について景観面からの考え方を整理する。

【堤塘景観の維持等】

堤塘の草地は、濠の景観の中で重要な要素であり、これを維持するため、定期的な草刈りを継続する。なお、草地管理に当たっては、草地の生物相への配慮についても検討を行う。また、千鳥ヶ淵のサクラについて後継樹の検討についての知見の蓄積を図る。

【設置物に関する考え方】

濠及び周囲への工作物等の設置は、必要最小限とし、既存の景観を損ねないよう、あるいは、より良いものとするように象徴性、歴史性に配慮したものとする。

また、一時的な工作物の設置、調査、工事、行事等に伴う諸行為についても、同様に、必要最小限のものとし、象徴性、歴史性に配慮したものとする。

(2) 水質

①目標

皇居外苑濠の水質悪化による影響は、主に、アオコの大量発生による悪臭、景観面での支障であり、その防止を水質管理の基本的な目標とする。

これまでの水質目標値は、アオコの大量発生を防ぐ条件を定量的に示したものであり、本指針においても既存の目標設定の考え方と目標値を踏襲し、これを目指していくこととする。

水質指標	濠水の水質改善目標値
透明度	1～2 m
COD	2～5 mg/L
クロロフィル	8～30 μ g/L
T-N	0.33～0.6 mg/L
T-P	0.02～0.05 mg/L

②取組の方向

- 対策については、水環境改善分科会で示された分析結果や対策提案をもとに、コストや効果を考慮し、組み合わせ等について検討を行って作成した「皇居外苑濠水質改善計画」（別添2）に基づいて進める。
- 対策の進捗を評価するために、水質目標とは別に、暫定的な水質改善目標を設定して、施策の推進に当たるものとする。
- 当面の対策としては、濠水浄化施設による浄化機能の改善、濠水の循環機能の改善を図ることで、濠水の滞留を軽減し、かつ下水道事業者による合流式下水道の越流水の流入防止対策を主たる取り組みと考え、あわせて、雨水活用による補給水の導入について検討する。濠の干し上げ（水抜き）は、効果や生物への影響を検証しつつ、適切な実施方法や対象とする濠の検討を行う。また、大量発生時の対策としてアオコの回収も引き続き実施するものとする。
- 下水道の越流水の流入が停止され、当面の対策の効果が評価された後は、水質の改善状況、アオコの発生状況を勘案し、さらなる水質の改善が必要な場合は、底泥からの溶出量削減対策や新たな導水による浄化等について検討する。なお、水質保全のためには、景観や生物にも配慮しつつ、水生植物の適切な管理のための方針を策定する。

（3）生物の生息・生育の場

①目標

- 生物の生息・生育環境については、象徴性、歴史性を維持している濠の遺構や景観を損なわないように配慮しつつ、水質の悪化や外来種の侵入の始まる以前の濠が有していたと考えられる生物の生息・生育環境を取り戻すような取組を進める。
- 具体的には、現在生息しているジュズカケハゼ、ウキゴリなどの在来魚や在来のは虫類、両生類、ヘイケボタル、多様なトンボ類などの水生昆虫、ツツイトモ、エビモなどの水生植物、カモ類などの鳥類といった多様な生物が全体として継続して生息・生育できるような環境を目指す。
- 石垣、堤塘の生物についても、現存する希少な種の保全を図るとともに、維持管理における配慮等で、生物の生息・生息環境の改善を目指す。

②取組の方向

ア. 全体的事項

周辺地域を含め、生息・生育する生物に関する情報を収集し、過去及び現在の皇居外苑濠の生物環境を把握、分析することで、維持すべき生物環境の知見を集積し、管理方針の具体化に努める。また、これまで継承してきた皇居の特性を損ねずに生物の・生育環境を改善する手法についての知見の集積を図る。

また、生物の生息・生育への圧迫、種の交雑などのおそれがあるため、濠への生物の導入は特別の理由がない限り行わないものとする。

イ. 魚類

オオクチバス、ブルーギルなどの特定外来生物は、積極的な駆除を行い、外苑濠の在来的な生物相に大きな影響を与えない程度に生息数を制御する。また、他の在来種の生息に影響を与えるおそれのある外来種は導入しないこととし、捕獲した場合は濠に戻さない扱いとする。コイについても、増殖し、他の生物を比圧するおそ

れが高いことから同様の扱いとし、歴史的な経緯により排除が困難な場合であっても、特定の濠に隔離するなどの対応を検討する。

ソウギョなど、水生植物の管理の目的で放流された魚種であって、増殖していない種については、濠の水生植物の管理方針を検討する中で、今後、扱いを検討する。外来魚対策については、濠によって現状が大きく異なるため、各濠において、今後どのような対策を行い、どのような環境を目指していくのかについて検討を行う。

ウ. 鳥類

鳥類は、環境の変化により飛来地を変更するおそれがあり、冬鳥の飛来時期等において、音、光などにより不用意に急激な環境変化を生じないように配慮する。

コブハクチョウは、外来種であるが、導入の経緯や千代田区の鳥とされるなど地域に長く親しまれていること、他の生物に大きな影響を与えている状況ではないことを踏まえ、現状を大きく変える扱いはしないものとする。今後、個体数を大きく変えるような導入・増殖は行わないものとし、飼育の継続には、動物愛護的な観点からも適切な対応を図ることとする。

エ. その他の水生動物

ヘイケボタル、トンボ類など注目すべき種の生息について実態を把握し、それらの種の生息環境の維持について知見を深め、計画的な管理に反映する。

ヒキガエルやウシガエルについては、より広範囲を対象とした対策も含め検討を行う。

オ. 水生植物

水生植物について当面は現在の管理を踏襲するが、今後、水生植物の繁茂による景観、水質への影響との調整を図りつつ、生物の生息・生育環境を確保するための管理方法について検討を行う。また、これと関連して、ソウギョ等の水草管理を目的に放流した魚類の扱いについても検討する。

カ. 堤塘や石垣などの環境

ヒカリゴケの生育環境の管理や生物の生息・生育に配慮した草地管理について知見を集積し、維持管理に反映する。

(4) その他

①目標

公園利用の場、都市環境の緩和などの機能について、皇居外苑の特性を損ねないように配慮しつつ、機能の維持、改善を目指す。

②取組の方針

来苑者に皇居外苑濠の魅力が適切に伝わるように利用施設の整備、維持管理を行うとともに、情報提供に努める。「クールアイランド」としての機能を発揮できるような方策についての知見の集積を図る。